

1

指示語・接続語

◆指導ページ P.4～11◆

【指導のポイント】

★指示内容は直前部分を指すことが多いことを理解させる。指示語の理解が文章理解・問題解答に重要であることを理解させる。

★接続語の意味と種類の理解を徹底させる。前後の文がどのような関係になっているかをとらえるのに接続語が役立つことを理解させる。

演習問題A 1の板書例

<p>結論</p> <p>筆者の強調したいこと 「ふしぎ」なことに對して、事実とは違った自分 なりの説明を考へつくこともある =</p> <p>結論につながる大事な部分</p>	<p>具体例(子どもとせみ)</p> <p>せみを用いた母と子どもの会話を例に、「ふしぎ」 に對して自分で「説明」を考へることを説明している</p>	<p>具体例に対する見解</p> <p>それは単なる外的な「説明」だけではなく ⇔ 外的な現象 何かあると「お母さん」と呼びたくなる自分の 気持ちもそこに込められている ⇔ 子どもの心のなかに生じること</p>	<p>筆者の意見、考へ、まとめ</p> <p>心に収める =</p> <p>納得する(13行目～18行目に頻繁に登場)</p>	<p>具体例</p> <p>太陽と黄金の馬車に乗った英雄として物語ること</p>	<p>具体例に対する見解</p> <p>Bに入る語句は直後の人間にとって根本的な「ふ しぎ」に注目する</p>	<p>筆者の意見、考へ、まとめ</p> <p>今まで「神話」で「現象」を説明していたものを 「自然科学」が登場</p>
--	---	--	--	---	--	--

演習問題A 2の板書例

<p>結論</p> <p>「だが」↑転換⇨話の話題が変わる はかなさを見きわめたいうえで、あらためて人間関係を 考へる ← 強調</p>	<p>人間関係</p> <p>われわれが人間関係を考へるうえで大事なの は、まずそれぞれの人間が誰にもわからない 内的な自我をもっていることをみとめること である。</p>	<p>筆者が言いたいこと</p> <p>人間同士理解しあうことはむづかしい。とい うことの理解が、「あらゆる人間関係の基本で なければならぬだろう。完全な理解ができ ないことを承知のうえで、近似的に他人の心 に近づく努力、それが人間関係の基本原則な のである。</p>	<p>誤解</p> <p>二人の人間のあいだでの意味のズレ</p>	<p>人間関係</p> <p>理解と誤解のからまりあい</p>	<p>理解</p> <p>理解はつねに「誤解」と抱き合わせ</p>	<p>たいへんな悪路</p> <p>多様な自我の並存と統合のくりかえしに堪える 能力をもった人間</p>
---	---	---	--	--	--	---

演習問題Bの板書例

<p>演劇</p> <p>役者⇨さまざまな役を演じることによってたえまな く変身をつづけている↑日常の体が障害 他人に扮したがるという理由↑ ← 裏返し</p> <p>一分野で成功、無数の他分野で無能 逆説を告発するために生まれた</p>	<p>スポーツ</p> <p>スポーツ：闘争とは正反対の性格 ↓ 種目の細分化・手段と方法のルール化</p> <p>スポーツ選手⇨与えられた虚構の人生目的に献身し、 実人生ではありえないような自己限 定に向かって努力する</p>	<p>現実の目的遂行</p> <p>無限の多様性と意外性に満ち溢れている ←</p> <p>現実の闘争⇨ルールというものがなく、最終の目 的にも手段にも限定がありえない 現実の闘争に備えて練習 ←</p> <p>無限定性に、意外性と多様性のすべてに對應</p>	<p>ギリシア時代</p> <p>見るためのスポーツが成立 ←</p> <p>他人の鑑賞のために身体運動の練習に励む専門家がいた ↓ 完結した技能のための技能、演技</p>
--	---	---	--

2

段落の要点・段落相互の関係

【指導のポイント】

◆指導ページ P.12～19◆

★筆者が何かを比較している部分や強調している部分に着目すると、段落の要点をとらえやすいことを理解させる。

★段落ごとに何が書かれているかをまとめ、段落の冒頭や終わりの文章に着目して段落相互の関係をとらえる。

演習問題A1の板書例

段落ごとに何が書かれているかまとめる

- ① 水は人間生活に欠くことのできないもの
← 故郷の水が一番おいしい↑例を挙げて説明している
- ② 大洋に水はいくらでもあるのに、飲むことができない
← 肝心なことに役立たない
- ③ 脊椎動物は体重の七〇%が水分
回虫は七九%
カタツムリは八四%
クラゲは九八・二%
生まれたての赤ん坊は七〇%
↓
具体例
- ④ 人間は二割の水を失えば生命をも失う
水はいくらとりいれてもエネルギーや体温の本源にはならない
- ⑤ **重要**
↑投げかけ↑重要
① 体内の水は、多くの養分を溶解して吸収を促し、
いろいろ有害成物を溶解して排泄を容易にする。
② 体温調節もほとんど水分の蒸発によって行われている
- ⑥ 人間の体の中には養分をためられているので、それを使えばしばらくは生きることができ
水を飲まずにがまんできるのはせいぜい1日くらい
← 人間は水を飲まずには生きていけない
← 水は欠くことのできないもの

演習問題A2の板書例

段落ごとに何が書いてあるかを考える

- ① 日本語の間という言葉の意味
1つ目 **空間的な間**
- ② 日本の家は壁で仕切り、鍵のかかる扉で密閉しない
→ 指示語に注意
このような個室
- ③ 障子や襖で仕切るので、西洋の石や煉瓦や木の壁と比べると軽やかではかない
- ④ 日本人は昔から自分たちの家の中の空間を自由自在につないだり切ったりして暮らしてきた
→ ④の要点(問4)
- ⑤ **2つ目 時間的な間**
- ⑥ 西洋のクラシック音楽はさまざまな音によって埋め尽くされている
(例) バッハ・モーツァルト↓息を継ぐ暇もなく息苦しい
- ⑦ 日本の音曲は音の絶え間がいたるところにあり、長閑
(例) 琴・笛・鼓↓谷川のせせらぎが聞こえることもある
- ⑧ **3つ目 心理的な間**
人々の暮らしを円滑に運ぶことができる
- ⑨ 日本文化は間の文化↑**結局**
- ⑩ **和の実現⇄共存**
二人にあいだに十分な間をとれば互いに共存できる
- ⑪ 和とは異質なものが調和し、共存すること
← 両者のあいだに間が必要
← 和が誕生するためにはなくてはならない土台が間

演習問題Bの板書例

段落ごとにまとめる

- ① 学校教育はなぜ必要か↑**問いかけ**
- ② **第一** 世界はあまりにも広く、すべてを経験することはできないから
→ **筆者の言いたいこと**
- ③ 過去に発見され、歴史のなかで再確認されてきたものの
- ④ 経験の完成の場所として、教育という営みを発明し、教室という別世界を囲い込んでいる
- ⑤ 現実とはいえ、私たちは、半ば以上、実際には見知っているわけではない
→ **第二** 現実行動にあたって失敗を避けるには、まづもって「練習」をしなければならぬ
- ⑥ 行為のプロセスを意識し、そこからプロセスを支える「型」を身につける
- ⑦ 現実行動は練習のうえで始めて成り立つ
技術を駆使するプロセスを絶えず見直し、身につけ直さなければならない
- ⑧ 学校は、あらゆる知識を現実行動から切り離し、行動のプロセスを教える場
- ⑨ **第三** 私たちが行動するためには「型」を持たなければならぬ
- ⑩ 型を身につけ、それがまるで無意識であるかのように流露するようになる
- ⑪ 日常生活も「型」という枠組みによって支えられている
- ⑫ 芥川を例に「型」を説明
- ⑬ 教育が必要な最後の理由は知識が経験から得られないこと
- ⑭ 眞実が別だということを知識として身につけているのが現代人

3

要旨

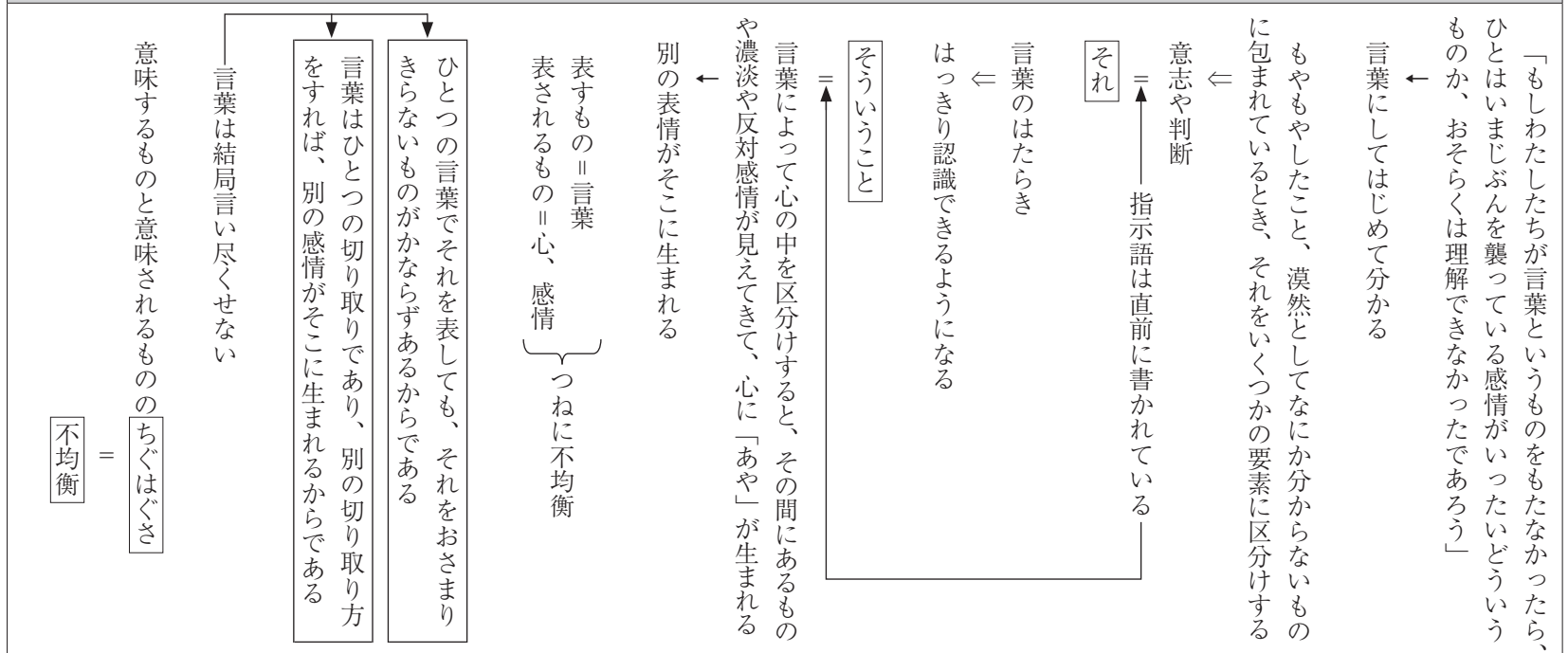
◆指導ページ P.20～27◆

【指導のポイント】

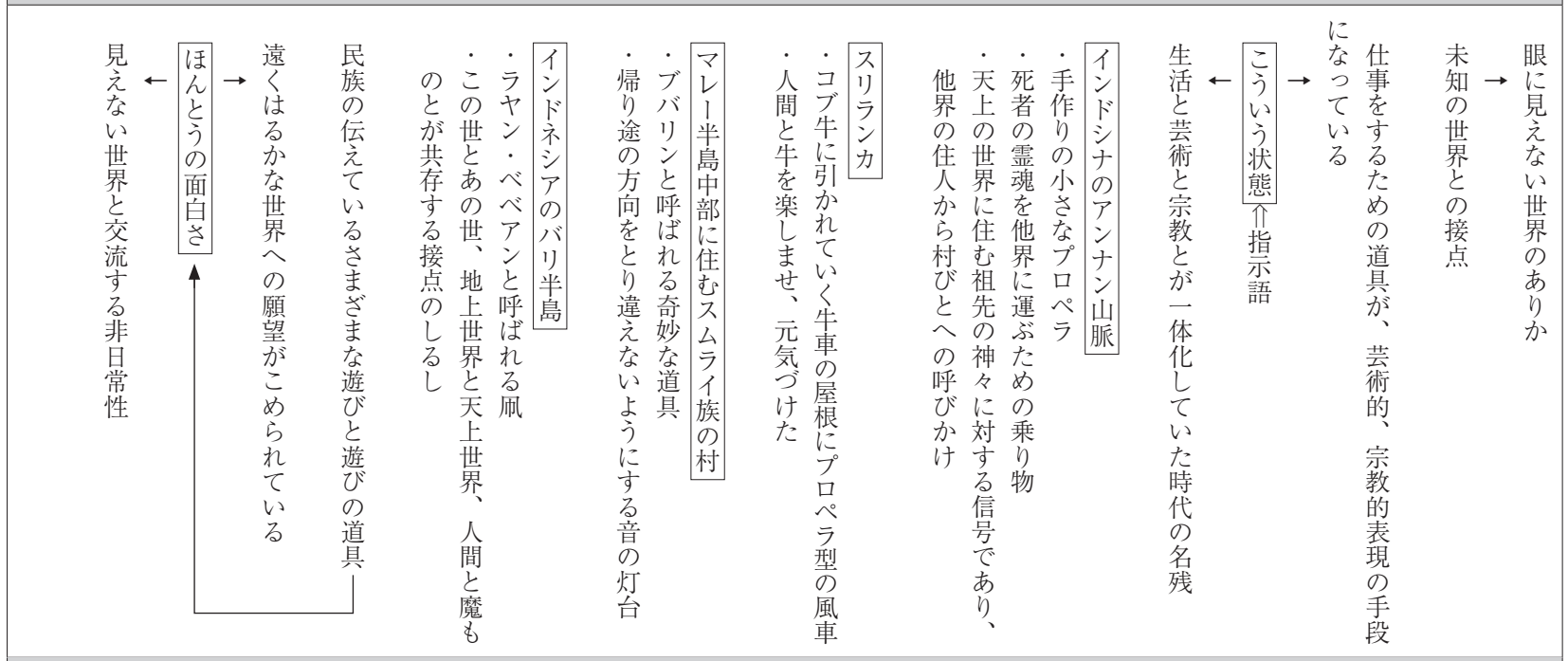
★話題について筆者が読者に伝えたいことが要旨である。形式段落の要点を把握して、意味段落に区分することで要旨をつかむ。

★解答に字数制限がある場合は制限字数の9割程度は書くようにし、字数オーバーに注意する。

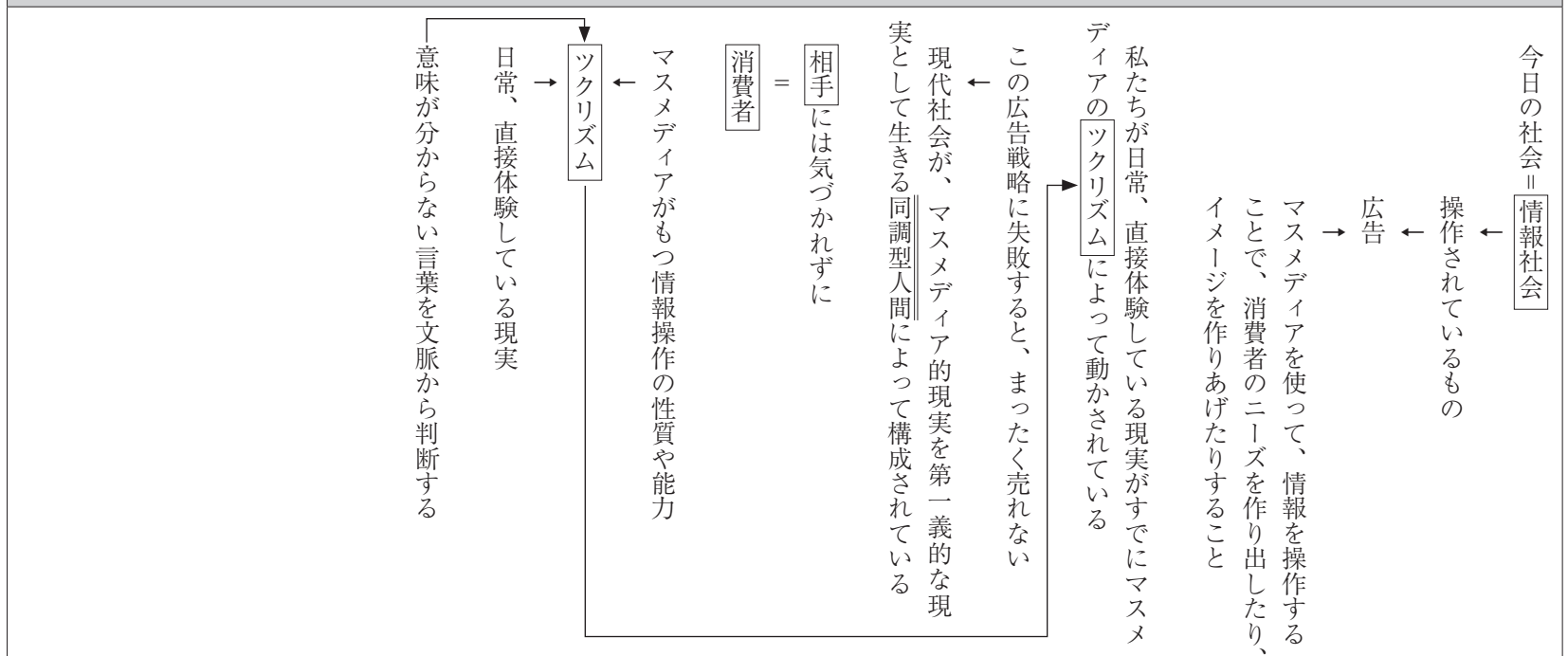
演習問題A 1の板書例



演習問題A 2の板書例



演習問題Bの板書例



4

あらすじ・場面・情景

◆指導ページ P.30～37◆

【指導のポイント】

★文章の「いつ」「どこで」「だれが」「なにが」「なぜ」「どうした」に注目し、場面や情景を読み取る。

★描写や感覚、登場人物の気持ちを表す文に着目して、情景を想像することも重要であることを理解させる。

演習問題A 1の板書例

物語りの整理をする

登場人物が多いので、登場人物を把握する

- 登場人物
- ・おばあさん：会話の中心人物
 - ・ミーコ：インコを連れてきた猫
 - ・チサノ：インコに餌をやるうとして逃がした
 - ・ぼく
 - ・オカメインコ：逃げたインコ
 - ・爺さん：隣の人。寝てる

医者にサジを投げられた

医者に見放された

チサノがにこにこ笑いながら……

それまで会話中にはわんわん泣いていた、とあるが、笑っている

文章の面白いところ

過去の出来事を話している

過去の話しを思い出して笑っている

6行目からの会話文に「」をつける

「この子がわんわん泣きながら、隣にいるわたしのところに来てくれた。わたしはあわててうちにもどってきた。爺さんはぐうぐう軒をかいて寝てるんだけど、医者にサジを投げられたわけだし、人手は足りてるし、わたしがそばにいてもしょうがないからね。こまごました手伝いなんかは、また出直してやってあげようと思ひ、この子といっしょに戻ってきた。それで、くわしくこの子から話をきいたの。でも、いくらくわしく話をきいても、どうにもならないわねえ。飛んでいった鳥をつかまえることなんかできないわよ。だから、「インコが戻ってくるまで待つしかないよ」って、言い聞かせたの。すると、「きつと戻ってくる？」ってこの子がきくから、「それはわからない」と答えたわ。「もし戻ってこなかったら、あきらめるよりしかたないじゃないの」って言うて聞かせただけけど、この子はわんわん泣くのよ」

演習問題A 2の板書例

現在

- ・ラムネは屋台で売っている
- ・一本百円
- ・コップに注いで飲む

時代

- ・一九五三年 高校一年 朝鮮戦争後
- ・日給百六十円
- ・朝八時から夕方五時までびん洗い
- ・夏休みの四十日間働いた

北九州の八幡

特需ブーム

ラムネのびん洗い

意外にむつかしい

両手で持ったびんを、すつと回転するブラシにあてるが、へたするとハンマー投げみたいに飛ぶので、「死んでも放すな」と命じられている

しっかり握ってがんばるしかない

ドキドキして待った

残業要因になりたいから

理由

ラムネは飲み放題

だが

せいぜい五、六本

飽きる

ラムネのかけっこ

しかし

レッテル貼りのおばさんにしかられる

演習問題Bの板書例

最初の場面

一羽のがんが苦しんでいる

理由 気まぐれな狩猟家かいたずらすぎな鉄砲うちの仕業

沼池の岸

青草の密生した湿地

わたしの思い屈した心を慰めてくれた

この鳥をじょうぶにしてやろうと決心

それを両手にかかえて家に持って帰りました

がん

自分と同じ境遇にあるがんに対する共感

わたしの屈した心

五しよくの光

夜ふけの月

一番目の場面 がんの傷が治る

サワンはどうやらこの沼池を好んだらしい

水浴に飽きてしまわなければ、わたしがいくら呼んでも水から上ってきませんでした

井伏鱒二

一八九八年 広島県生まれ 早稲田大学文学部

新興芸術家で、特に戦争への怒りと悲しみをこめた作品が戦後目立つ(「黒い雨」など)

「屋根の上のサワン」と同時期の著書に「山椒魚」がある

5

表現の特色

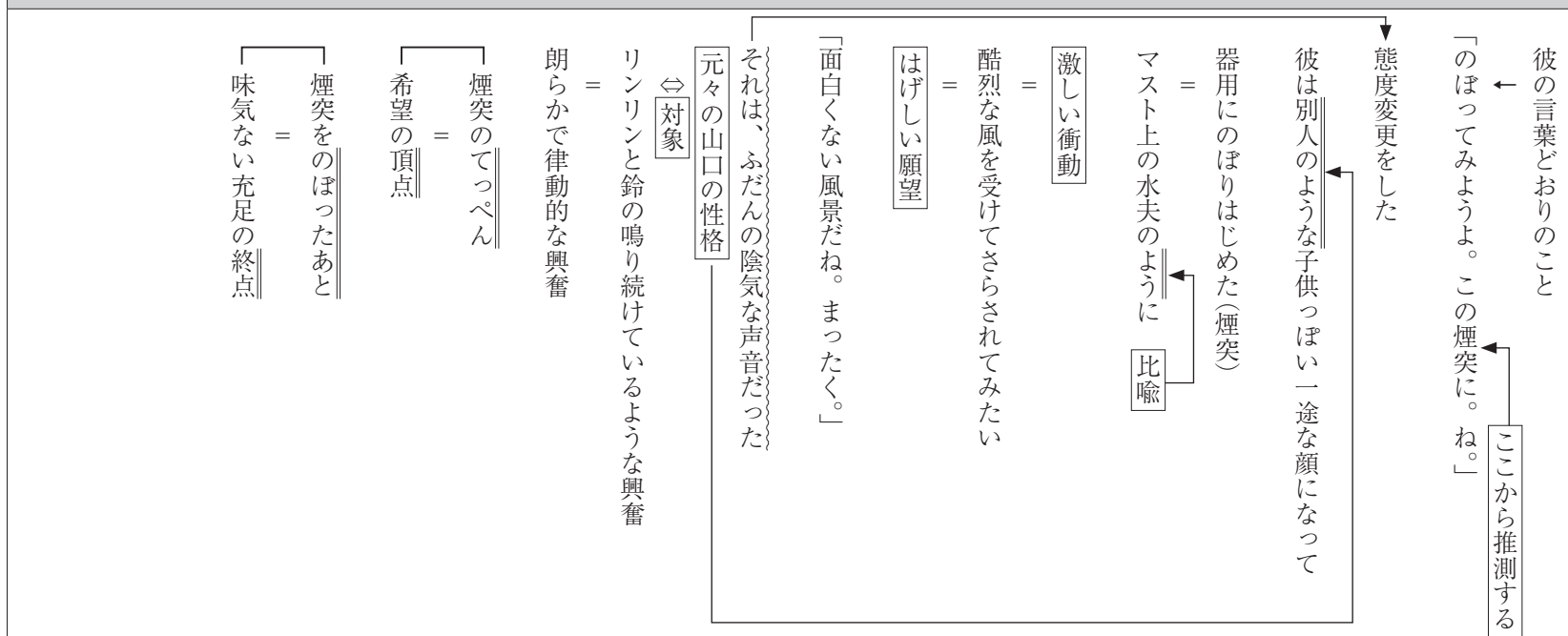
◆指導ページ P.38 ~ 45 ◆

【指導のポイント】

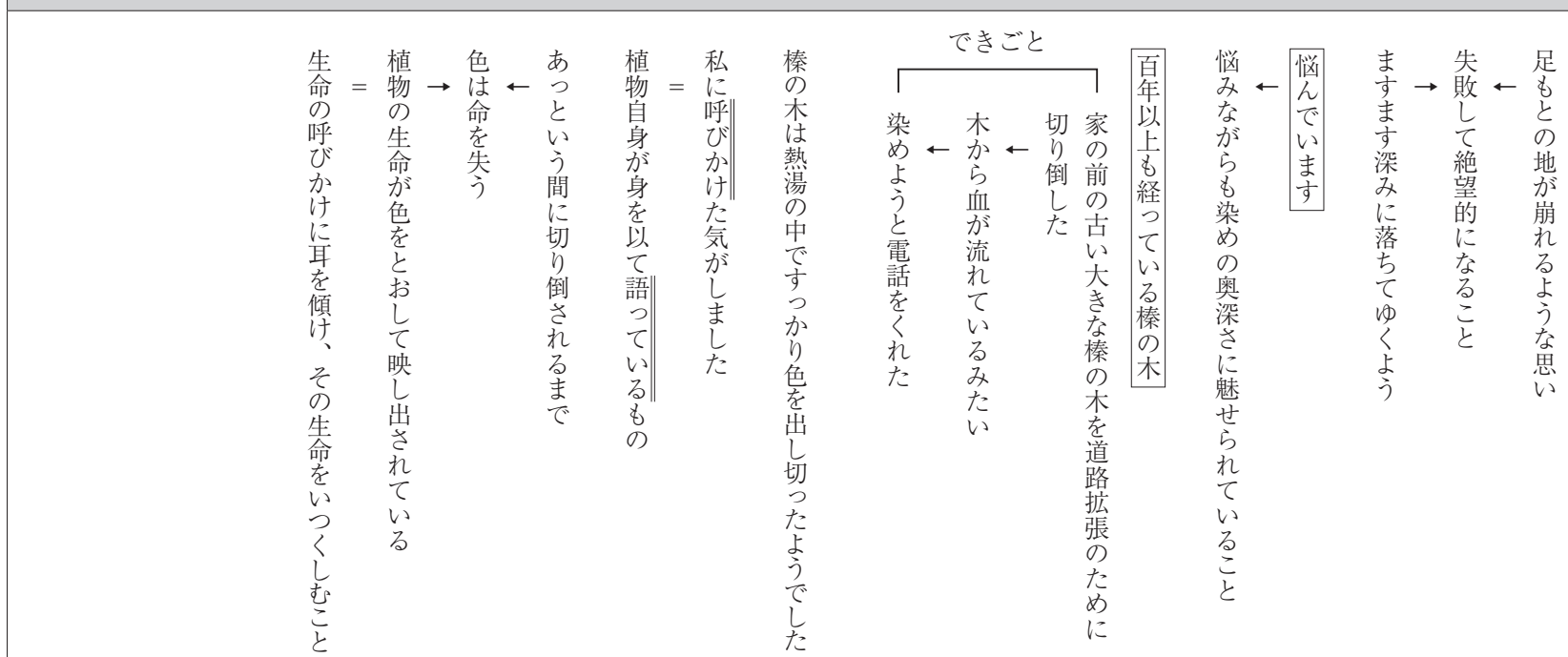
★文学的文章や随筆で用いられる表現技法について、具体的な用例を通して学習する。

★特殊な表現技法は筆者の強く主張したい点に使われることを理解し、それを手がかりにして、心情や要旨、主題をとらえる。

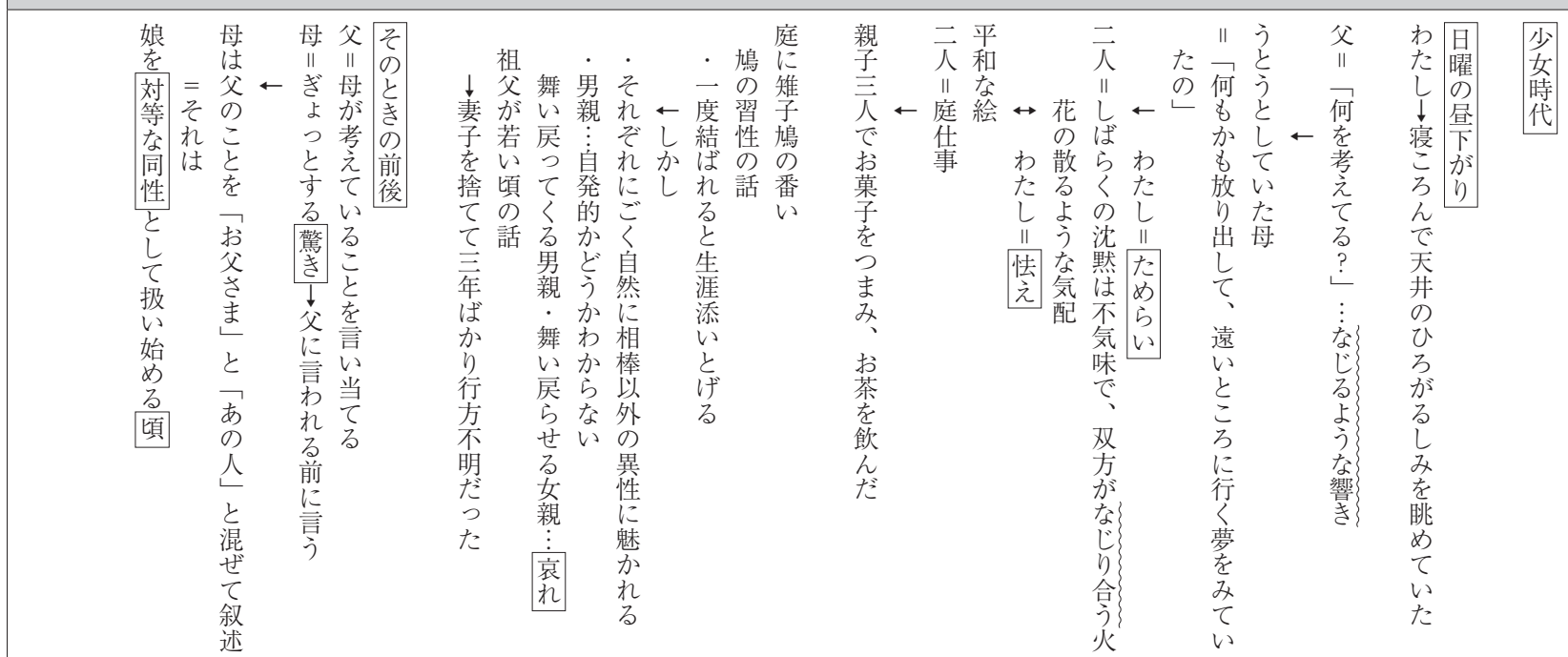
演習問題A 1の板書例



演習問題A 2の板書例



演習問題Bの板書例



6

主題

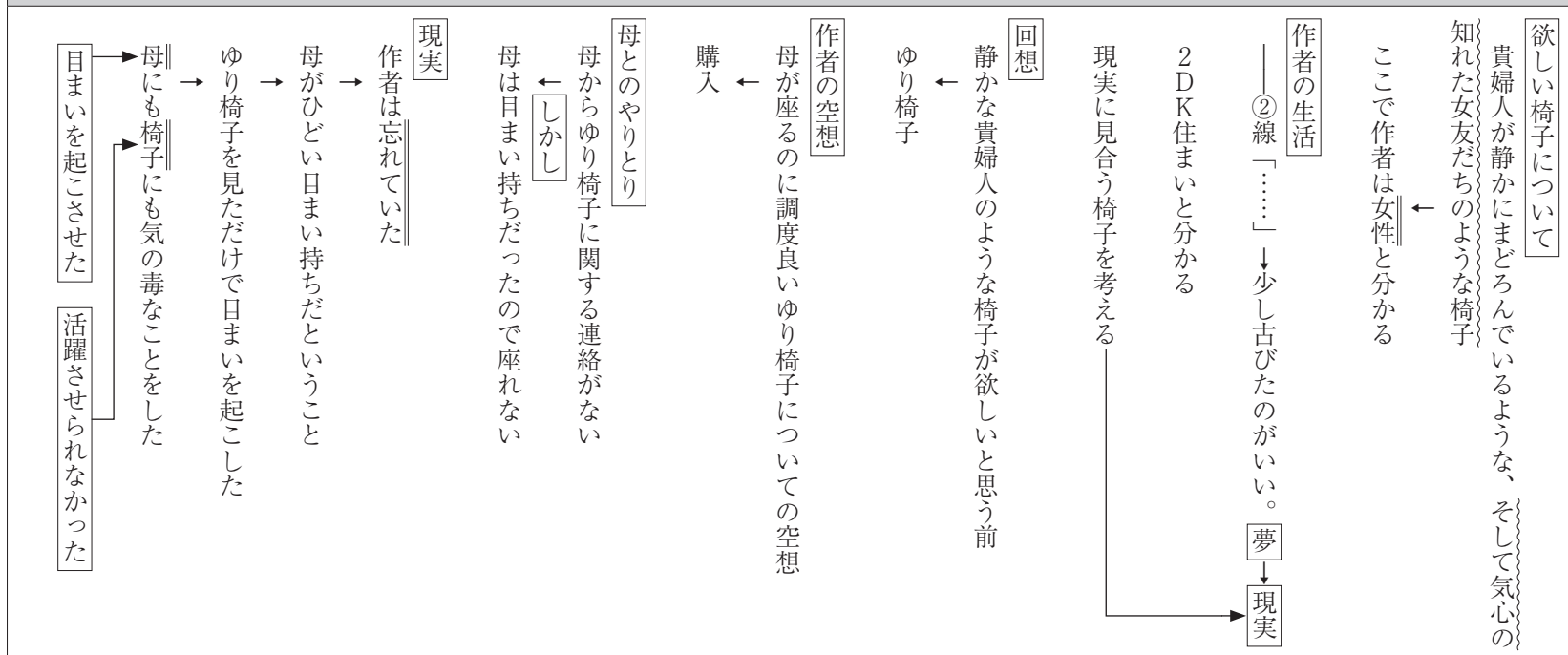
◆指導ページ P.46～53◆

【指導のポイント】

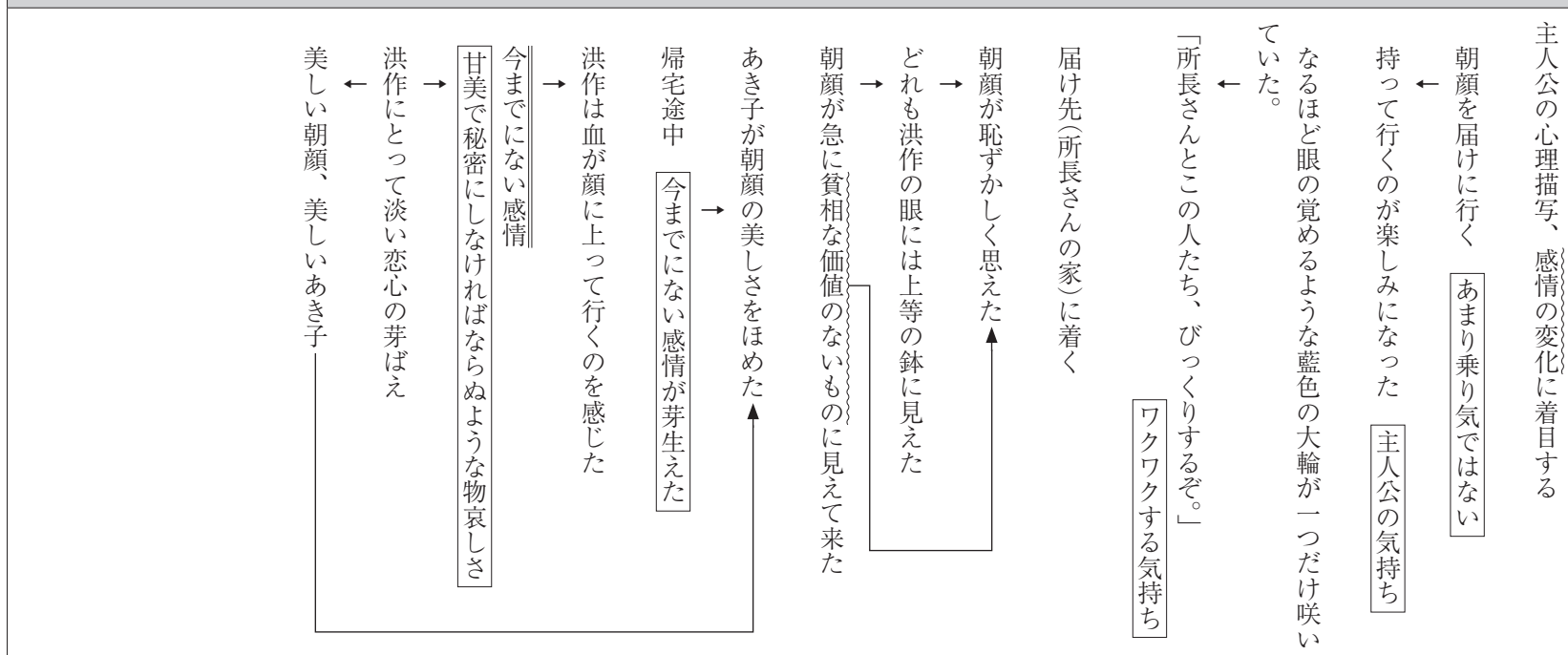
★作品の組立、筋の山場、独特な表現、中心人物の考え方や生き方に着目して、小説の主題をとらえる。

★意味段落ごとに内容を把握し、筆者が注目していることや表現の背後に隠されているものを読み取ることで、随筆の主題をとらえる。

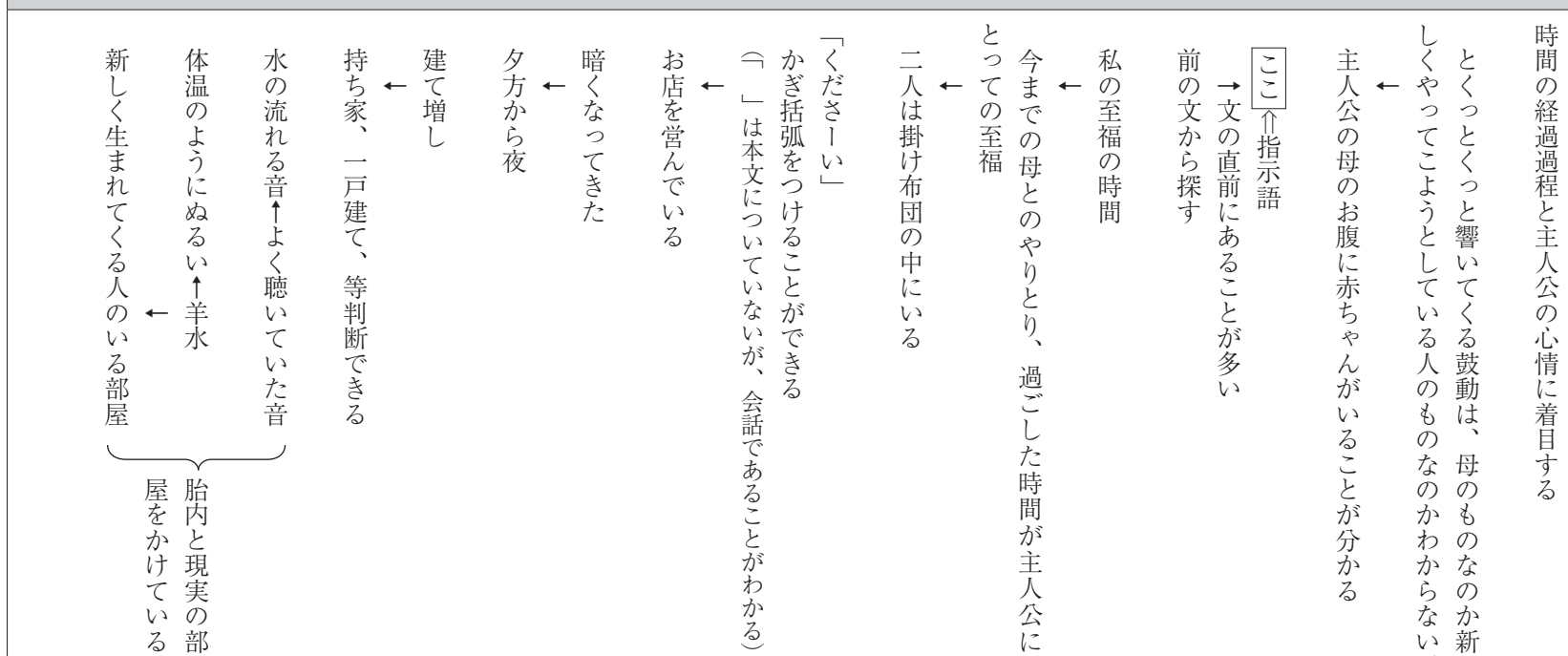
演習問題A 1の板書例



演習問題A 2の板書例



演習問題Bの板書例



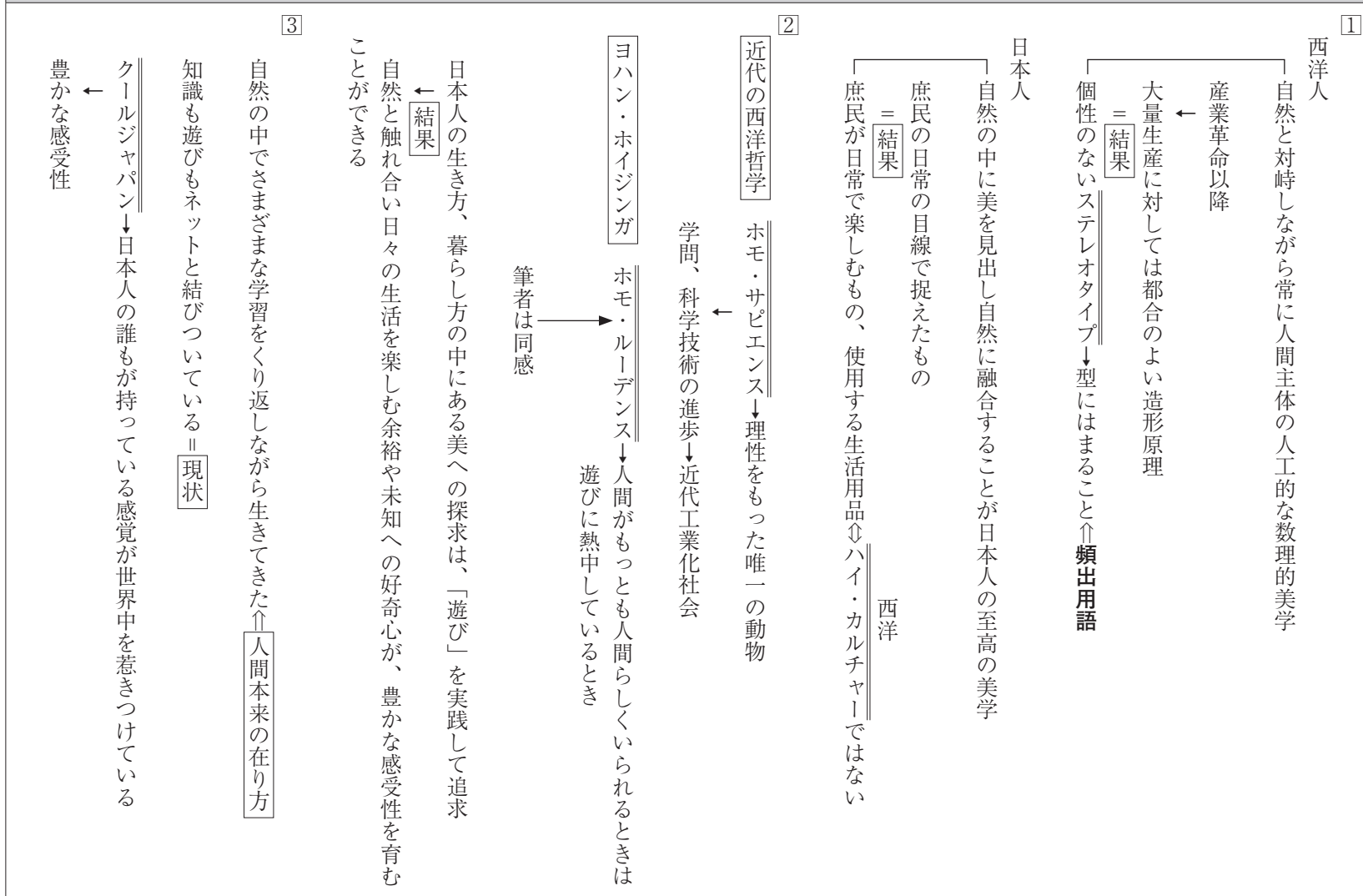
1・2章のまとめ

◆指導ページ P.54～61◆

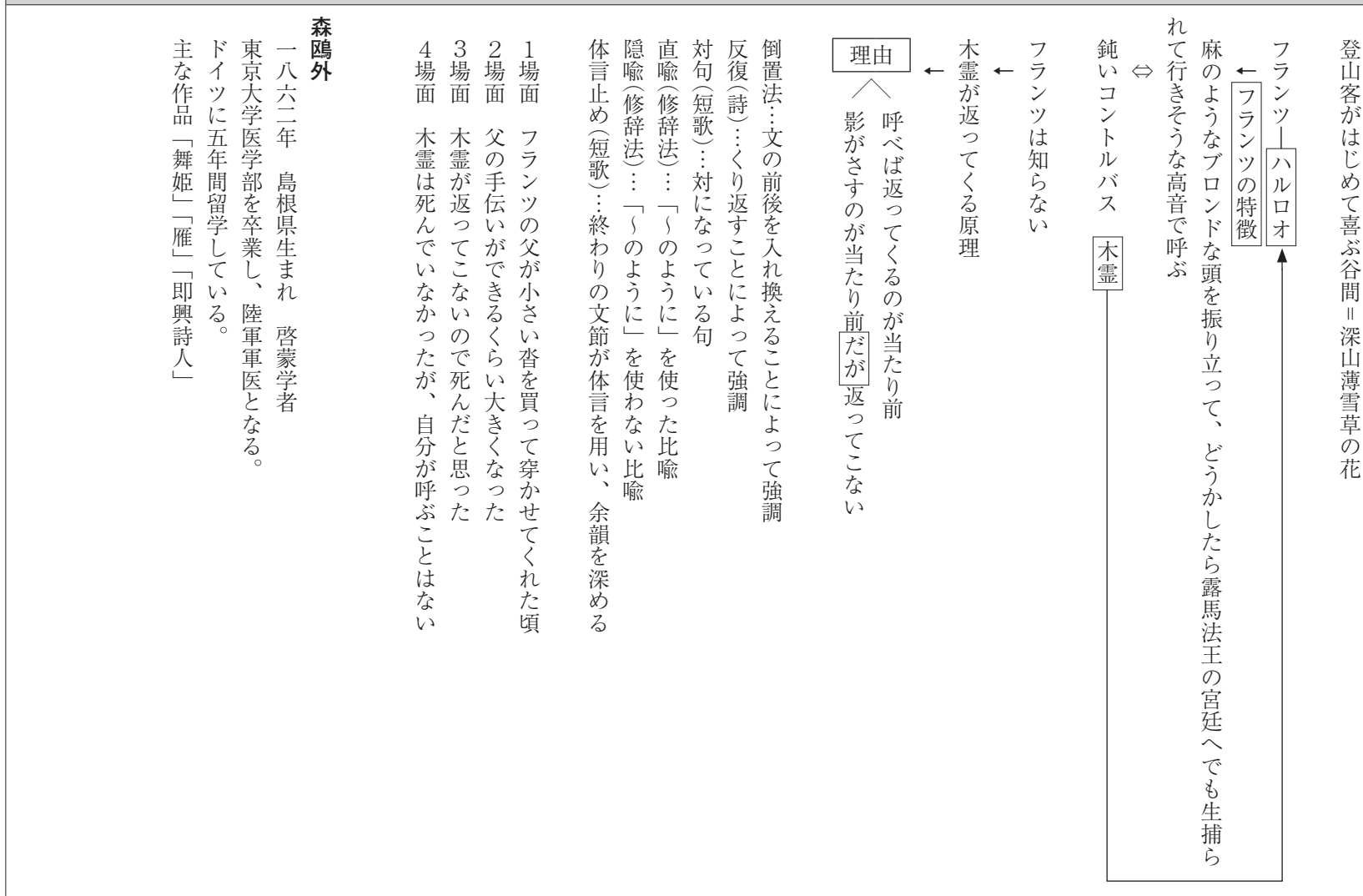
【指導のポイント】

- ★指示語や接続語に注意して意味段落ごとの内容を把握することで、問題文の要旨を読みとることを理解させる。
- ★筆者の独特な表現や、表現技法の効果を確認する。登場人物の行動や心情を把握し、小説の主題をとらえることを理解させる。

演習問題の板書例



演習問題の板書例



8

形式・特色・技法

◆指導ページ P.62～67◆

【指導のポイント】

- ★短歌の句切れや表現技法を学習する。俳句の季語や句切れ、表現技法を学習する。
- ★筆者の心情や独特な表現に着目して、詩の種類や表現技法を学習する。

演習問題Aの板書例

詩の種類

- ・抒情詩：感情や情緒をのべること。叙情ともいう
- ・叙景詩：自然の景色などを表現したもの
- ・叙事詩：伝説や歴史的事件などを客観的に表したもの

名月や池をめぐりて夜もすがら

山は暮れて野は黄昏のすすきかな

大寺をつつみてわめく木の芽かな

雲の峰水なき川を渡りけり

枯山の月今昔をてらしてゐる

炎天の遠き帆やわが心の帆

入れるものが無い両手で受ける

松尾芭蕉
一六四四年 伊賀生まれ 「さび」「しをり」「細み」が根本的精神
「さび」 閑寂から生まれる情調
「しをり」 「さび」に導かれる余情
「細み」 自然の風物に心が通い合う姿勢

与謝蕪村
一七一六年 大阪生まれ 逆境の体験から生まれた独特な主観が多い

正岡子規
一八六七年 松山生まれ 夏目漱石と親しい 「日本」に作品を発表
三四歳で死去。仰臥漫録は病床日記

高浜虚子
一八七四年 松山生まれ 正岡子規に影響される 「ホトトギス」に作品を発表

斎藤茂吉
一八八二年 山形生まれ 「アララギ」に参加 医学部卒業
主な作品「赤光」

演習問題Bの板書例

初夏の曇った午後の庭 体言止め
褐色の なめらかな 飛石のうえ。 体言止め
蝸牛が 粘る時間を這って行く 隠喩 倒置法
やわらかな 二対の角を突きだして。 倒置法

薄汚れた 白っぽい 銀色の道。
↑ 蝸牛が這ったからできた道

そこをととも小さな蟻が 一匹 体言止め
自転車に乗って ジグザグ急ぐ。

雨が ポツンポツンと降ってくる。
父と幼い子に まぼろし遊びをさせた
はかない銀の細道は やがて消える。

蝸牛も どこかへ行方不明。 体言止め
いや 萬草の大きな葉のうえで
おいしそうな 遅い昼めし。 体言止め

表現技法	
直喩	「〴〵のような」を用いて例える
隠喩	「〴〵のような」を用いらず例える
擬人法	人間以外のものを人間のように表現する
対句	対応する内容と似た調子で並べ、印象を深める
反復法	同じことばや似たことばを重ね、リズムを生む
倒置法	語順を逆にして強調する表現
体言止め	行末や結句を体言で止め、余韻や感動を残す

霜やけの／小さき手して／蜜柑むく／わが子しのばゆ／風の寒さに
← 本来の語順
= 全体に「寒さ」がかかる
四句切れ
風の寒さに霜やけの小さき手して蜜柑むきわが子しのばゆ

倒置法

山上憶良
遣唐使として渡唐
歌風 軽妙機知 現実凝視

主題・鑑賞

◆指導ページ P.68～75◆

【指導のポイント】

- ★表現技法を用いている部分に注目し、登場人物の立場になって読み、作者の感動の中心をおさえるように指導する。
- ★鑑賞文では、対象の詩歌と解説文を照らし合わせて読み進めることにより、筆者の考え方を読み取れるように指導する。

演習問題Aの板書例

1

表現技法			
擬人法	対句	呼びかけ	体言止め
人間以外のものを、人間であるかのように表現する技法	対応する内容をよく似た調子で並べて、語調を整えたり、印象を深めたりする技法	話しかけるように呼びかける技法	行末や結句を体言で止め、感動や余韻を残す技法
			語順を逆にして、意味を強める技法
			「〴〵のような」等の語を用いて直接たとえる技法
			「〴〵のような」等の語を用いらずにたとえる技法

(1) 正六角形の不思議な花 **倒置法** ↓ **強調**
 結晶 ← **たとえ**

(2) 厳しい日々
 ながいながい冬の日
 ゆるやかな感情 ↓ 陽ざし
 膝をのぼさう
 脚をなげだそう
 ↓ リラックスできる

(3) 自由な姿勢で飾りけのない話をする。 ↑ 設問に「どんなこと」とあるので、解答の文末に「こと」をつける。

(5) **指示語** 直前に書かれている ↓ 君ら若い娘たちも……飾りけのない話しをしよう

三好達治
 一九〇〇年 大阪出身 東大仏文科
 室生犀星、萩原朔太郎に影響を受ける
 主な作品「測量船」「駱駝の瘤にまたがって」

小林一茶
 一七六三年 信濃国出身
 逆境の生涯を迎えた為、独特の主観が強く示されている
 主な作品「父の終焉日記」「おらが春」

演習問題Bの板書例

1

(1) 非常な固体の粉末 「」で強調されているところに注意する
 ← 異様な光景

(2) ひら〜と舞ひ行くは、
 夢とまことの中間なり。
 → 本文と解説文を照らし合わせながら読む
 その水は、夢とまことの中間を流れているのだ。蝶はその水の上を、ひらひらひらと舞って行つたはずだ。

蝶がどこへ飛んでいったのかを解明する手がかりが透谷の詩の中に見出せる。
 ← 幻視は去つたのだ

(5) いつのまにか ↓ 水のなかったはずの河原に、いつのまにか水が流れている
 ← 時間もなければ空気もない世界

中原中也
 一九〇七年 山口出身
 ランボー、ヴェルレーヌなどの影響を受け、象徴派の詩を形成
 長男を亡くし、千葉の精神病院へ入院した後、鎌倉へ転居。三十歳で病死。
 主な作品「山羊の歌」「在りし日の歌」

北村透谷
 一八六七年 神奈川出身 早稲田大学中退
 自由民権運動に参加。日本最初の自由律長詩を発表。
 島崎藤村、上田敏などと「文学界」を創刊。
 樋口一葉、泉鏡花などに影響を与える。
 日本最初の近代的平和主義運動の指導者でもあったが、二六歳で自殺。

北原白秋
 一八八五年 福岡出身
 与謝野鉄幹の誘いで詩歌を発表。
 童謡運動も起こす。
 晩年に視力を失う。
 主な作品「邪宗門」「思ひ出」「桐の花」

古典の実践 1

◆指導ページ P.76～83◆

【指導のポイント】

- ★歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す部分を押さえる。現代語と意味の異なる古今異義語を覚え、古文の意味を取り違えないようにする。
- ★係り結びの法則を覚え、意味の違いにも注意する。会話文に移る直前の語句を探し、会話を示す部分を理解する。

演習問題Aの板書例

枕草子

作者 清少納言
成立 九九五年頃
中宮定子の後宮の文化精神を巧みに書きとめたところが評価されている
書き出し「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく…」

無名抄

作者 鴨長明
成立 一二二一年頃
隠遁生活を経た後に発表した作品。無名抄の後、方丈記を著した。
方丈記の書き出し「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず…」

1

① ころほい↓ころおい
② 世になう↓よにのう
③ いみじう↓いみじゅう
いとめでたし
とても素晴らしい

をかし → 趣深い

1行目 紅梅、桜
2行目 藤の花
3行目 橘

3

「鹿の音をきくに我さへ [] 谷の庵は住みうかりけり」とこそつかうまつりて侍れ。これいかが侍る。

→ 「鹿の鳴き声を聞くと、私さえ泣けてしまいました。この谷間の庵に住むのがつらいことです。」とお詠みいたしております。これはいかがでございますでしょうか。

なんでふ御坊のかかるこけ歌よまんぞとよ。なかれぬるとは何事ぞ、
[] 強調
なかれぬるとは何事か
[] 強調
どうしてあなたがこのような浅はかな歌を詠もうとするのか。

演習問題Bの板書例

(8) ア 基僧
イ 中算
ウ 中算
エ 中算

← 動作主・主語に気をつけて読む。

(10) (4)の係り結びの法則を参考にして考える

「悪しく申してけり。さらば、御前をば、小寺の小僧と [B] 申すべかりけれ。」

← 已然形(終止形は「けり」)
こそ ←

(4) 或いは物語などしてなむるたり [A]。

係り結びの法則
文末は終止形で終わらない

こそ	か	や	なむ	ぞ	係助詞
已然形	連体形			結び	
強調	疑問・反語		強調	意味	

(2) ① いふ憎めて↓いうそういて
② さらば↓では
③ あぢきなく↓つまらない

古典の実践2

◆指導ページ P.84～91◆

【指導のポイント】

- ★大まかな話の流れを把握して、登場人物の相互関係を読み取る。主語や文末が省略されていることが多いため、補いながら読み進める。
- ★旧暦の月の異名と対応する季節を覚える。漢詩・漢文の返り点の法則を覚える。

演習問題Aの板書例

1

「殺して物にせんずる」
→ 「その亀買はん」
→ 殺されるのはかわいそうだと思ったから。
← しかし
心に思ふやう親のたから買ひに隣の国へやりつる銭を、亀にかへてやみぬれば、親
いかに腹立給はんずらん。
← 親の様子を想像

2

旧暦

夏			春		
6月	5月	4月	3月	2月	1月
水無月	皐月	卯月	弥生	如月	睦月
みなづき	さつき	うづき	やよい	きさらぎ	むつき

冬			秋		
12月	11月	10月	9月	8月	7月
師走	霜月	神無月	長月	葉月	文月
しわす	しもつき	かんなづき	ながつき	はづき	ふみづき

係り結びの法則

係助詞	結び	意味
ぞ	連体形	強調
なむ		疑問・反語
や		
か	已然形	強調
こそ		

同じき十一月に年号を養老と改められけるとぞ。⑨

← 係り結びの法則

← いふ(強調)

△現代語訳▽
同じ年の十一月に年号を養老と改められたということである。

演習問題Bの板書例

伊勢物語

作者 在原業平
成立 九〇〇年頃
構成 約一二五段。約二〇〇首。
文体 語彙は少なく、文章も極度に単純化
ジャンル 「けり」を効果的に繰り返す
その他 歌物語
初冠から始まって、辞世を詠むところで終わっている。
在原業平の歌を中心に、主人公の一代記風の構成で二条后との恋、伊勢齋宮との恋、東下り、惟喬親王との従事の物語がメインで、それに関する小話が付け加えられている。内容的には男女の愛情の話が多い。

身をえうなき物に思ひなして、
「京にはあらじ。あづまの方にすむべきくにもとめに。」とて、ゆきけり。
← おるまい ← 東国
自分を役に立たない者と思い込んで、東国に自分の住める国を求めたから。
その山は、ここにたとへば、ひえの山を、はたちばかりかさねあげたらんほどして、
なりは、しほじりのやうになん、ありける。
⇒ 筆者が京にいて、京の読者を意識して書いている
← その山は、ここ京都にたとえてみると、比叡山を、二十ほど重ね上げたようなくらいで、形は、塩尻のようであった。
⇒ 望郷への思い

3・4章のまとめの問題

◆指導ページ P.92～101◆

【指導のポイント】

- ★表現技法に注意しながら、連ごとに何が書かれているか把握する。鑑賞文と照らし合わせて、詩のどの部分を指しているか把握する。
- ★俳句独特の表現や季語を把握する。古文では敬語に注意しながら、文章の主語や動作主が省かれている部分も含めて読み進める。

演習問題の板書例

		表現技法				
		呼びかけ	対句	省略法	倒置法	脚韻
		呼びかけるように表して引きつける	対応する内容を良く似た調子で並べて、語調を整えたり、印象を深める	省略することによって引きつける	語順を逆にして、意味を強める	句末、行末に同音または同じ母音の語をおいて音調を整える

① 「〜のように」等を用いて直接にたとえる

②

A 有るほどの菊秋なげ入れよ／棺の中体言

B 桃の花を／満面に見る／女かな ↑字余り

C 竹馬や／いろはにほへと／ちりぢりに冬

D 時鳥／鳴くや湖水の／ささ濁り夏 体言

E 白牡丹／といふといへども／紅ほのか ↑字余り

F 木がらしや／目刺にのこる／海のいろ冬 体言

夏目漱石
一八六七年 東京出身 東大英文科卒
正岡子規と同級生 イギリス留学 英語教師
主な作品「吾輩は猫である」「坊っちゃん」「三四郎」「こころ」

高浜虚子
一八七四年 松山出身
正岡子規から指導を受ける
「ホトトギス」を編集

芥川龍之介
一八九二年 東京出身 東大文学部卒
一九二七年 服毒自殺
主な作品「羅生門」「地獄変」「蜘蛛の糸」「トロッコ」

演習問題の板書例

③

A 向日葵は金の油を身に浴びて

B あたらしく冬きたりけり鞭のごと

C 久方の光のどけき春の日に↑頻出

D み吉野の山の白雪つもるらし

E 山道に昨夜の雨の流したる

F 世の中に絶えて桜のなかりせば

A しづ心なく花の散るらむ

I 春の心はのどけからまし

ウ 見よ天を指す光の束を

エ ゆらりと高し日のちひささよ

オ 松の落葉はかたよりにけり

カ ふるさとさむくなりまさるなり

キ 花ぞむかしの香にほひける

ク 幹ひびき合ひ竹群はあり

④

腰などもかがみ、目などもかすみ、言ふことも聞こえず、さるほどに老いければ、大しうこの朽ちはたたる御姿

← 朽ちはたたる御姿

全体を考える

【指導のポイント】

★活用する自立語や活用しない自立語の種類を区別できるように学習する。付属語についても、種類を区別できるように学習する。

★紛らわしい品詞の識別は入試頻出事項なので、実際に演習問題を解きながら学習する。

演習問題の板書例

1

(1) 主語

① 一晩じゅう降り続いた雪は、昼になるともうすっかりやんでいた。

④ 背後に何かがある気配を感じてそっと振り返ると、一頭の大しかが木々の間からぬっと姿を現したのだった。

(2) 修飾

② ねばり強く話し合いをした結果、ゆつくりと地域住民のかたくなだった気持ちも動きはじめ、私たちの提案が実現する可能性が出てきた。

④ 差し出された素朴な民族楽器の弦を指ではじいてみたら、それは何とも言えぬ静かな、しかし、心の中にしみ入るような音を鳴り響かせたのだった。

演習問題の板書例

7

(1) ① 子どもに晴れ着を着せる。着十せる 下一段活用

② 子どもに運動させる。するの活用Ⅱサ行変格活用

⑥ ぼくなら、そんなことはしない。断定してる

⑦ 海がおだやかなら、泳ぐことにしよう。形容動詞Ⅱおだやかな

⑧ 彼が行くなら、ぼくも行きます。助動詞

⑨ 川をきたなくするのはやめよう。きたないⅡ形容詞

⑩ この程度の問題なら、ぼくにもできなくはない。打消している

(2) ② 私は行けないので、代わりに妹を行かせよう。使役
未然形

③ いまにも雨が降り出しそうな天気だ。体言
様態

④ 去年のことが昨日のように思い出される。「。」で終わっている

(3) ③ そんなことは日常ではよくあることだ。

ア それはある雨の降る夜のことでした。体言

① 彼はついに名誉ある賞をもらった。補助動詞

ウ 時には冷酷であることも要求される。

エ 二人はあることがきっかけで仲良くなった。体言

資料問題の実践

◆指導ページ P.112～117◆

【指導のポイント】

- ★スピーチ原稿や、表・グラフ、地図・イラスト、新聞・ポスターなど、さまざまな資料の特徴を読み取ることができるようにする。
- ★資料をもとにした文章、資料からわかる事実、工夫や効果を読み取ることができるようにする。

演習問題1の板書例

●【書店で働く人へのインタビュー】

田中さんが尋ねたことと森山さんの答え

- ・この仕事をしようと思った理由
- ↓本が好きだから
- ・仕事に就く前と後で、仕事に対する見方は変わったか
- ↓変わった
- ↓こんなに体力を使うとは思わなかった
- ・仕事に対する見方が変わったことで、仕事が嫌になることはなかったか
- ↓全くないということはないが、仕事をやめていたら、楽しさもわからなかった
- ・この仕事に就いてよかったこと
- ↓自分が薦めた本をお客様が喜んでくれたとき

●【発表原稿】

ゆりのき書店での職業体験

- 書店の一日の流れ
- ・雑誌を棚に並べる
- ・開店までに清掃
- ・袋詰めやレジの補助、新刊を並べる、棚の整理
- ← 一日中立ちっ放しなので、足がとても疲れた
- 店員さんが話してくれたことで、とても印象に残っていること
- ・お客さんと会話をしながら、自分の読書体験も参考にし一冊の本を選んだ
- ←
- ・後日、そのお客さんから感謝された
- ←

●書店員という仕事をしてよかったと思った

●まとめ

仕事で大切なこと

＝ 人と人との関わり合いを大事にすること

演習問題2の板書例

●【話し合い】

【アンケート結果】について

- ・全く読まない
- ↓勉強や部活動で忙しくて、本を読む時間がないのだろうか
- ・5冊以上
- ↓「本をよく読んでいる」層
- ＝ 読む時間がないだけでは説明がつかない
- ・1・2冊、3・4冊
- ↓「本をそこそこ読んでいる」層
- ←
- 二極分化になっている
- ←
- 図書室を利用してもらうようにするにはどうしたらよいか考えるべき

●【スピーチ原稿】

みんなが図書室を利用したくなるような提案

- ・本を読まない具体的な理由
- =
- 勉強や部活動で忙しい、テレビやインターネットのほうが面白い、読みたい本がない、など
- ↓本を読む習慣が身につけていない
- ・図書室には、図書委員が読んで面白かった本を紹介するコーナーを設けた
- ↓同じ中学生が「面白い」と思う本を十冊そろえている

演習問題3の板書例

●「食料自給率」とは

↓「国内の食料消費が、国産でどの程度まかなえているかを示す指標」

グラフ①日本の食料自給率の推移

1965年が73%で、そこから減っていき、2013年は39%

グラフ②食料自給率―各国との比較

カナダが一番で25%、日本は39%

←

不足している分＝輸入に頼っている

●「食料自給率が低下した原因」とは

↓食料消費の変化に生産が対応しきれなかったこと

表③1965年 ごはんが一日5杯で、肉料理は月に3杯

1980年 ごはんが一日4杯で、肉料理やたまご料理が増えた

2008年 ごはんが一日3杯で、肉料理が月の3分の1、植物油も1965年と比較して3倍

グラフ④

1965年 Cが多くFが少ない

1980年 Cが少し減りFが増えた

2008年 Cが更に減りFが大幅に増えた

●私たちが食料自給率を向上させるためにできることは

↓食べ物を残さないで食べ切るようにする

好き嫌いを言わないで何でも食べるようにする

表⑤米、野菜、じゃがいもは自給率が高く、牛肉、小麦、大豆の自給率は低い

←

肉や油を使う料理を減らして、米や野菜、魚などの量を増やす

作文・表現の実践1

◆指導ページ P.118～123◆

【指導のポイント】

- ★与えられたテーマの特徴を理解し、根拠を述べたうえで自分の意見をしっかり書けるようにする。
- ★表やグラフを読み取って要約し、表やグラフの表す事がらに基づいて自分の意見が述べられるようにする。

演習問題1の板書例

〈体育祭の場合〉

体育祭の方が良い部分

- ・全員が参加できる
- ・チームワークが必要なので団結力が強まる
- ・練習を通じて仲間意識が高まる

体育祭のデメリット

- ・運動が苦手な人は不向き
- ・天候に左右される
- ・運動が得意な人ばかり目立つ

←

私は体育祭を希望します。なぜなら、文化祭は個々に活動することが多いですが、体育祭はみんなで勝利を目指す、という明確な目標があるので、チームワークが発揮できると思うからです。

〈文化祭の場合〉

文化祭の方が良い部分

- ・個々に得意部分を生かすことが出来る
- ・外部の人も沢山来るので、校外の人と触れ合うことが出来る
- ・勝敗がない分、目標を達成することで団結力が強まる

文化祭のデメリット

- ・色々な制約がある
- ・放課後残って作業しなければならない
- ・雨の場合、集客が見込めない

←

私は文化祭を希望します。なぜなら、体育祭は運動の苦手な人にとって楽しむことが出来ないからです。文化祭ならば、個々に能力を発揮する場があると思うからです。

演習問題5の板書例

「調査結果を元にした作文の書き方」

今、幸せだと思う人は増えてきていて、中学生では77%強である。

【図表1を読み取っている】

中学生が大切だと思っていることは、健康で友達がたくさんいることであり、

①図表2で1番目と2番目に多いものを挙げる

勉強ができることは三割にも満たない。

【後で自分が書きたいこと＝勉強をすることが大切】

私は、中学生という立場では勉強ができないとつらいことが多いと思うので、

【自分の考えを表と関係させながら書く】

幸せだと思う割合の高さと勉強を大切に思う割合の低さは理解できない。しかも、将来に夢を持っていることを大切だと思う人が五割近くいるのなら、

【最初だけではなく、積極的に図表からわかることを取り入れる】

もつと勉強を大切に考えるべきだと思う。

【自分の考えをより明確にする】

何を幸福と思うかは人それぞれである。健康で友達がたくさんいれば幸福だろうと私も思う。

①で書いたことを繰り返す＝強調

しかし、中学生はやはり勉強が大切であり、それが将来の幸福にもつながると思う。

【自分の考えとまとめ】

16

作文・表現の実践2

◆指導ページ P.124～129◆

【指導のポイント】

★手紙文では頭語と結語の決まりに注意する。また、前文・主文・末文を意識して、わかりやすい表現を心がけて書くようにする。

★詩歌の鑑賞文は、表現技法に着目し、映像化して思い描きながら書けるようにする。スピーチ原稿は聴衆を引き付けるように工夫する。

演習問題の板書例

4

△手紙の書き方▽

主文

条件①
拝啓↑頭語
前略↓草々
拝啓↓敬具

時候のあいさつ
立春とは名ばかりで、寒い日が続いております。皆様、お変わりございませんか。こちらも皆元気に過ごしております。

安否のうかがい

さて、私も四月からは高校生になります。かねて、進路が決まったら旅行に行こうと友人と約束していましたが、九州に行くことになりました。

設定

そこで、誠に勝手ですが、お宅に一泊させていただきませんか。三月二十五日にお寄りする予定ですが、いかがでしょうか。改めてお返事をうかがいます。

設定

しばらくこの寒さが続きそうです。どうぞお体に気をつけてお過ごしください。

条件②
二月七日↑日付

条件③

条件④
鈴木一郎様↑あて名

条件①
敬具↑結語

差し出し人の名前↓吉田 孝

演習問題の板書例

6

△スピーチの書き方▽

出だしの工夫

「うどん」を知っていますか。小麦粉をこねて平らにし、ひものように切つてゆで、しょうゆやみそ味の汁で煮て食べるものです。山梨県の「ほうとう」は、うどんの仲間ですが、ゆでません。こねてひものようにしたものを、野菜と一緒に汁で煮て、みそで味をつけます。ゆでていないので小麦粉が少し溶け、全体がどろどろしています。

具体的に郷土がわかるように書く

メリットと自分の意見を書いていく
以前は、「ほうとうが作れなければ主婦とは言えない。」と言われ、どの家庭でも「温かくて、冬に食べる」とイメージできる

メリット①

意見

メリット③
りません。どんぶり一杯で、食事一回分が済みます。かぼちゃを入れると甘くなり、最高です。この便利でヘルシーで体も温まる「ほうとう」を、ぜひ味わってみてください。

スピーチであることを忘れない

メリット②

説明的文章の演習 1

◆指導ページ P.130～139◆

【指導のポイント】

- ★今まで学んできたことを復習しながら、応用力を高めていく。記述問題を苦手とする生徒が多いので、少しずつ得点出来るよう指導する。
- ★文章全体の内容や筆者の主張を読み取れる部分を線引きして、チェックしながら読み進められるよう指導する。

演習問題の板書例

①

(1) 「鋭さ」

- ← 尖端的な表現
- ・ センセーショナルな表現
- ・ 人の目をそばだたせようということ

← 人の目を引きつける強烈な個性

(2) そういう↑指示語

← 前の部分をさがす

鈍い努力の連続

(3) Aの直前

← ある作品の鋭さと言われるものが、真か偽か、それを判断する一つの方法は、その鋭さと呼ばれているものが、いかなる種類の鈍さの中から発生して来たものであるかを見ることである。

→ 4段落でくり返し使われている言葉に注意する

→ 直前をさがす

指示語

それを見抜く必要がある

演習問題の板書例

④

(2) ⑥は具体的な説明

⑦ 卵：たんなる思いつき

雛：まとまった思考

(3) そういう↑指示語

← 前の部分をさがす

外から適当な刺激

(4) 卵が温められてうまく孵化する

← インスピレーション

うまく孵化せず闇に消えていく考え

流れ星

(5) そういう偶然

指示語

← 前の部分をさがす

⑮と⑯をまとめる

← 人生を変える何気ない出会い。

(8) 決定的瞬間

- ・ そつたくの機
- ・ 得がたい転機
- ・ 親鶏のつつき
- ・ きっかけ

○まさにこのとき、というタイミング

演習問題の板書例

⑤

(2) 1段落(具体的事例)

← だから

2段落(理由)

3段落

=そして

4段落

(3) 強烈な太陽に照りつけられた大地は、水酸化鉄と水酸化アルミニウムが硬盤状になったカチンカチンの、いわゆるラテライト層が露出してしまふ。

← 理由

地表にたまった僅かな土もこの雨に押し流されてしまふゆえに、森の中の表土は浅く、従って木の根も浅くならざるを得ないのである。

← 地表の土がスコールで流され、表土が浅いから。

(7) 土壌も、そこに生える植物も、そして人間も、外部に物を貯えることができない。保持することができるのは、ただ自分の体の中にあるものだけなのだ。

← 具体例(33行目)

← 筆者の意見(46行目)

← 筆者の結論

つまり、Cこそは、生物としての人間の犯した数々のルール違反の中でも、最大のものであり、まさに原罪なのである。

説明的文章の演習 2

◆指導ページ P.140～149◆

【指導のポイント】

★段落ごとに何が書かれているか把握する。記述問題は、本文に書かれていることを引用しながら、簡潔に書けるようにする。

★筆者の主張を正確に読み取ることが重要であることを理解させる。

演習問題の板書例

①

① 辿りついた **結論**＝アンダーライン
 ← 相手との間を測り、相手と間を合わせるため。
 ← **人代名詞**
 ほとんど無限に近いほど多い
 ← **指示代名詞**
 透明なる論理性と、みごとな整合性をもつ
 ← **工夫**
 相手との関係が断絶状態におちいるのを防ぎ、間を保たせようとする
 ← **ヨソモノ宣言**
 人間界のヨソモノである猫が喋っているのだという
 ことを読者が意識すればするほど作品の滑稽味と
 厚味は増すであろう、と漱石は計算したにちがいな
 い。
 ← ナカマ
 ← 縄張り
 ← 相手に合わせての自分定め

演習問題の板書例

②

「レゲンダ」オウレア」は完全な創作だったので
 ← 文学作品というすぐれた虚構の中のみごとなうそで
 した。
 ← 「レゲンダ」オウレア」という古文書は存在せず、
 小説の中で、あることになっている古文書だった、と
 いうこと。
 ← そこから脱出
 ← **指示語**
 ← 直前に着目
 がんじがらめに規制を受けている状態。
 ① 芥川を例に「うそ」について述べている
 ②
 ③
 ④
 ⑤ うそをつく楽しみについて述べている
 ⑥
 ⑦
 ⑧ 筆者が言いたいこと
 ⑨
 ⑩
 ⇒ 形式段落がある場合は、意味段落ごとにまとめて整理する

演習問題の板書例

⑤

近代における国民的な義務教育、「普通教育」の主
 要な機能
 ← **強調**
 少なくともその潜在機能が——教科の内容自体
 よりもむしろ、時計的に編成され管理された生活秩序
 への児童の馴致にあるということ
 ← 「かつての柱時計や目覚まし時計」のはたらき
 ← **強調**
 ——すなわち出勤、登校、帰宅およびそれらに間接
 する作業のための——社会的時間の告知者にとどまった
 〓スケジュール化された人生〓
 「できごと」というものが実際以上に単調である
 と信じ込んでしまう。」
 +
 スケジュール化された未来に向かって人びとの
 関心をいつも上すべりさせてゆく結果、現在への
 生きいきとした関心の集中を希薄化し、実際にも
 人生をますますより単調なものにする
 =
 人生は単調なものだと信じ込んでしまい、その結
 果、現代への関心が薄れ、実際にますます単調な人
 生になってしまうこと。

長文・記述対策

◆指導ページ P.150～157◆

【指導のポイント】

★書き抜きの問題は、設問の指定文字数から推測することが、問題解答に重要であることを理解させる。

★文中の語句を使う問題は、自由記述ではないので、文末の表現や「てにをは」を変える程度にし、自分の意見は述べないように指導する。

演習問題の板書例

①

食事というのは高いテーブルがあつて椅子に座つて食べるものだという「知識」を、この子はすでに持っていたはずだ。

⇒ 自分の「知識」

← しばらくすると、おそらくこの子は自分の「知識」を修正せざるを得なくなるだろう。

← 食事は椅子だけではなく床に座つて食べることもある。

⇒ 両者を両立させるような新たな「知識」

「たえず『学び』を経験している」とありますが、「学び」とはどのような営みのことだと筆者は考えていますか。

← 簡単に言うと、「学び」とは体験から何らかの新しい「知識」を導き出す心身の営みのことを言う。

「学び」にとって「教え」が絶対条件でない

← 「学び」の意味をこのように考えてくると、そこに必ずしも「教え」ということが必要とは限らない

+ 「学び」とは体験から何らかの新しい「知識」を導き出す心身の営みのこと

= 「学び」は、自分自身の経験から新しい「知識」を導き出すことであり、他者からの「教え」が介入しなくてもなされているから。

演習問題の板書例

②

「連帯」という理念と「逆」のもの

← 現代史のなかで「連帯」は衰弱しつづけたのである。もちろん一部の人は本気で社会的な連帯を創造しようとしてきた。

← しかし

← 全体としては連帯なき個人の社会がひろがり、自分の世界だけを守ろうとする自己防衛的な精神が社会を覆つてきた。

この問題

指示語

← 直前からさがす

← ところが対立的な関係もまた成り立つのである。だから対立的な部分もふくめてどう連帯するのかを考えなければ、しよせん強者による都合のよい連帯になってしまう。

← 他人と対立的な部分もふくめてどう連帯するのかという問題。

日本の民衆の考え

← 矛盾とつき合っていくことが連帯である。とするなら自然と人間との間に生じるさまざまな関係と折り合いをつけていくことにしか、共に生きていく道筋は生まれない。

← 矛盾とつき合い、他者との間に生じるさまざまな関係と折り合いをつけていくことにしか、共に生きていく道筋は生まれない。

文学的文章の演習 1

◆指導ページ P.158 ~ 167 ◆

【指導のポイント】

★文中の事件やできごとに注目することで登場人物の気持ちの変化をおさえ、作者の伝えたいことを読み取る。

★指示語、接続語に注意して、文章や段落の相互関係を読み取れるようにする。

演習問題の板書例

②

岸壁を海に向かつて歩きながら
 ← ヘンなおいだ。しょっぱいような、苦いような、なまぐさいような
 これ、
 ⇒ のにおい？
 ↑ 海

ヨウイチくんの説明
 ← ヨウイチくんはよくしゃべった
 ← ぼくのためにしゃべっているんじゃないのかもしれない

頭の中では、東京のアサガヤの、こぼと幼稚園や富士見荘を思い浮かべていた。
 ← ぼくは引越してきた
 ← ぼくはずっと黙っていた

東京の生活が忘れられず、ヨウイチの話が頭に入らなかったから。
 ← すごく嬉しそうな顔になった
 ← 「練馬区いうたら、海まで自転車ですごくいいかかるんじゃないの？」
 ← 「田舎から引越してきたいうてバカにされりやせんど。釣りはだれにも負けんのだじゃ」

練馬区は海に近いと聞き、釣りに自信のあるヨウイチは、それなら東京でもバカにされなと思ったから。

演習問題の板書例

③

母は自分の留守中に学校の友達を家に呼んではいけないと厳命した。
 ← 何年前かにA棟の女の子が四階の窓から落ちて死んだ。

+ 火の元の注意をうろさくいったが、それも火事を起こしたら他人に迷惑がかかるという理由だった。
 ← 留守中に来た友達がベランダなどから滑り落ちると困るから。

← 一人で頑張って大変なのはこの人だ

母親
 慎がなにかの偶然や不運な事故で窓枠の手すりを滑り落ちてしまったとしても決して悔やむまいとはじめから決めている

+ 担任
 慎は新しい担任の先生が嫌いではない

= 母親は、頑張っても偶然や不運な事態が起きたら悔やむまい、と思っているが、先生は、なにがあっても生徒を守りきれると信じて頑張っている。

演習問題の板書例

⑤

沙金と次郎は共謀して、太郎を亡き者にしようとしていた
 ⇒ あらすじ
 ← いつかしなくてはならない事
 ← 次郎を殺すこと。

← 菌噛みをした
 ← 次郎を置いて行こうとしたから
 ← しかし
 ← 「弟」というなつかしい語が溢れてきた
 ← 次郎を見捨てて走り出した途端、弟への愛情がこみ上げてきたから。

← 不思議な愛
 + 肉身の、忘れる事の出来ない「弟」
 + ほとんど憎悪に近い愛
 = 分別を超えた忘れることのできない肉身愛。

芥川龍之介
 一八九二年 東京出身 東大文学部卒
 一九二七年 服毒自殺
 主な作品「羅生門」「地獄変」「蜘蛛の糸」「トロッコ」

文学的文章の演習 2

◆指導ページ P.168 ~ 177 ◆

【指導のポイント】

- ★今まで学んできたように、表現技法に注意して情景をイメージし、あらすじをとらえるようにする。
- ★本文に何が書かれているか、設問で何を聞かれているかを正しく理解して、記述問題が少しずつ得点できるように指導する。

演習問題の板書例

1

【場面】長が鮎を先生へ売るところ

- かれらの奸悪な計略
 - ↓まとめて売れば安くなるが、一尾ずつなら安い値踏みはできない
- ←かれらの誘導にしたがって、値段を付け、それらを買い取った
- 二、三日するとまたやって来た
- ←ふところの窮乏で鮎の買い取りを拒絶した
- = 予想しない事
- ←失望し、途方にくれた
- ←先生が駆け引きしているのではないかと疑った
- ↓値段を引き下げようとしているのではないかと
- ←そうでないもつと失望
- || 先生に鮎を贈呈しようとした
- || すがすがしく濁りのない顔：長たちの本質
- 私 大きな過誤を恥じた
 - ↓少年たちに狡猾と貪欲な気持ちを起こさせた
- ←「鮎をくれ」ではなく「鮎を売ってくれ」と云ったため
- ←私のさみしいふところを搾取↑狡猾と貪欲
- ←かれらも幸福ではなかった：貪婪な漁夫・わる賢い商人
- ←私は深く自分を恥じた
- ↓純真な少年たちの心をもてあそぶ結果になってしまった

演習問題の板書例

3

日本というのは悲痛な国よ

- ← 欧米は産業によって国が富んでいるが、日本は農業のほろく産業もないくせに、ヨーロッパの一流国とおなじ海軍をつくろうとしている、それも超一流の軍艦をそろえたがる
- + 外国から侵されるかもしれぬという恐怖が明治維新をおこしたのに、軍艦はみな外国製
- ← 日本は豊かな国ではないのに一流の海軍をつくらうとしているから。
- ← 日本は外国の侵略を恐れているのに外国製の軍艦しかもっていないから。
- || いくさぶね
- ← 固有の大和言葉でなければいけないという。ゲンカンということばを歌よみは歌をよむときにはわざわざいにくさぶねという。いかにも不自然で、歌以外にはつかいものにならぬ。
- ← 結局は生きた日本語ではないからじゃ。
- ← 生きた日本語ではない

司馬遼太郎

一九二三～一九九六 大阪出身

「梟の城」で直木賞受賞

歴史小説の改革者として活躍

主な作品「竜馬がゆく」「国盗り物語」「街道をゆく」

演習問題の板書例

4

- 見たこともない高貴な育ちの犬をもらった
- ← いい家の娘を養女にもらった気がしていた
- 三月ばかり経ってから東宮先生が奥さんと子供さんを連れて遊びに来た
- ← 私 ほととした
- ↓ 東宮夫人に気づいていないようだったミミイが、夫人を思い出し、興奮して飛びついた
- ← 興奮してもミミイは吠えなかった
- ← あんまりいい人たちに育てられたから、少しづつ育ちを悪くしようとした
- ← 私 罪ふかい人間
- ↓ 自分の教育によって、ミミイの中にある上品な、やさしい気質をなくし、がつがつしたつまらぬ犬にしてしまう
- ある日吠えた
- ↓ 六歳の少年と五歳の少女：粗末な扱い
- 吠えるべき時に吠えるにはどうしたらいいのだろう
- ↓ 恋愛をして、子を産んでから、メスは吠える
- ← 私の希望
- ← 美しく優しいメスとして育てる

長文・記述対策

◆指導ページ P.178～185◆

【指導のポイント】

★今まで学んできた文学的文章の特徴を踏まえ、比較的長い文章の要点を効率良く把握できるように指導する。

★記述問題は、要点をおさえて8割以上書けるようにし、少しずつ得点できるように指導する。

演習問題の板書例

①

●目が合うとなくとなくこちらが照れてしまう動物
 ← 例馬・鹿・ロバや牛・羊の類い
 ↓何を思い、何を考えているかは、まったくわからない
 ← 意外な「気の弱さ」：惹かれる
 ↓ 動揺や迷いが生じることもあるのではないかと
 ・ 悲しみを抱いているようなとき
 ↓ わたしを慰めてくれているような気もする
 ← 草食系の動物の濡れた瞳
 ↓ わたしたちの感情に働きかける不思議な力を持っている

●幼いころ、日高の山奥の温泉場で鹿に出会った
 わたしたちは目と目が合った
 鹿の目 || わたしを含むこの世界全体をまるくくむようにぼんやり見ていた
 ↓ 宗教的な瞳
 ↓ ひとの視線 || わたしという人間を世界から選別し、意味を与えるために、注がれるもの
 鹿の視線 || わたしを選別しない・わたしの輪郭をとかし、わたしを世界のなかへと
 かしこみ、ふたたびそこへ送り戻すような視線
 「鹿」 || カミサマの「使者」のイメージ ↓ 孤独の雫のようなものをもたらす

●村野四郎の「鹿」という詩について
 わたし || この詩を知っている ↓ この詩の中の「鹿」を知っている
 ↓ 「鹿」との再会 || 思いがけない幸福
 この詩の中の「鹿」 || ハンターに殺される一瞬前を生き続けている鹿
 ↓ 「予感の孔」を通して、死と生が緊密に結び合っている
 予感 || 不幸な能力
 ← 無力・あきらめ：驚くような軽さで、死の予感と死のあいだに、一瞬ふわりと浮かび上がっている
 ← 死
 ← 輝かせる
 ← 生

演習問題の板書例

②

私(為兼)と兄弟(長兄(想空(為盛))・次弟(寂超(為経))・末弟(寂然))
 弟たち || 西行に倣って遁世を選ぶ。
 寂超 || そんな中途半端な態度でいるから、あの純一な人が解らないのだ
 私 || 西行について
 ・ 年若くして出家したことに尊敬
 ・ 透徹した人生への見方を持っていたことに畏れ
 +
 ・ 別の人生を歩む人
 ・ とても理解できない人、理解を超えた人
 ← 西行を尊敬しているのに、自分とは別世界の人と思って距離を置いている。
 私 が 解らなかつた点 || 西行が私や寂然から朝廷の様子などを聞きたがったこと
 ← 西行の話の内容：歌枕から人々のくらしや政治などに変化 || 腑に落ちない寂然 || 西行の関心の拡がりは大らかな心を手に入れた結果
 ← 西行の手紙
 前日までついていたのとは別の眼がついたのだ
 ← 今までは森羅万象を愛しんで眺めてきた。そこにそうした御仏の法身が横たわっていると感えたからだ。
 +
 その朝、別に御仏の法身を仄かに感知するというのではなく、そのままの姿で落ち着いた素朴な魅力があった。
 ← 以前は、森羅万象に御仏の法身を感じし、愛でていたが、今は、自然そのままの姿に心をひかれるようになったということ。
 ← そのとき、胸の奥底から、突然、「この世がたまらなく愛しい」という叫びが、悲鳴のように迸り出てきた。
 ← 直後から探す
 ← 私の魂は物怪に憑かれたようにこの世のなかに走り出していた。私はもうそこに立っていることができなかつた。桜の花の前に膝をつき、片手で上半身を支えながら、私は白い光の泡立つ激流に洗われていた。

詩歌の演習

◆指導ページ P.186 ~ 195◆

【指導のポイント】

★8・9課で学習した内容に注意して、作者が伝えたいことを読み取れるように指導する。

★表現技法などの知識事項は演習を通じて覚えるようにする。

演習問題の板書例

②

父親にも無理に止める理由はなく、またそのつもりもない。でも少しA。

湯のみの中を覗き込んだって何もあはしはない。

← 無意識に覗き込んでしまいがら

← 淋しい

表現技法					
直喩	「〃のような」を用いて例える				
隠喩	「〃のような」を用いず例える				
擬人法	人間以外のものを人間のように表現する				
対句	対応する内容と似た調子で並べ、印象を深める				
反復法	同じことばや似たことばを重ね、リズムを生む				
倒置法	語順を逆にして強調する表現				
体言止め	行末や結句を体言で止め、余韻や感動を残す				

← **決意**

母と焼く パンのおいの 香ばしき

← 真夏真昼の 記憶閉ざさん

← パンを焼いた記憶↓懐かしい

← 捨てるにも捨てられない↓閉ざす

← 懐かしい記憶を振り切って、その先への一歩、人生の新しい段階への一歩を踏み出す。

← 懐かしい記憶を振り切って新しい一歩を踏み出す決意。

演習問題の板書例

③

↓ 人々をしぐれよやどは寒くとも

↓ 人々ニ対シテ——コノ人々ヲモテナスタメニ——

時雨ヨ降レ

← いったん抽象化理想化される

← 眼前現実の知友門人を、人間的な現実の臭みから離れて、「風雅の友」として表現

← 「人々」「やど」↕時雨(自然)

← 生活者の次元から、自然としての厳しい時雨を見ている

← なまなましい生活人のところを貫いて、ぬきがたい風雅心のあることも認められる

← **A** けふばかり人も年よれ初時雨

季語 || 初時雨 季節 || 冬

⇔ 「人々」に対して。そのもてなしに、時雨よ降れ

← **C** 旅人と我名よばれん初しぐれ

← わが身も心も、自然とともに変容する

演習問題の板書例

④

(A) 惜しむべき 春をば人に 厭わせて

空頼めにや ならんとすらん

← **春をば人に厭わせて**

← あなたのつれない態度

← 空頼め

← たぶん『夏には逢おう』という約束さえ、当てにならないものになってしまうでしょう。

← 当てにはならないもの。

(C) 春毎に 花のさかりは ありなめど

あひみむことは 命なりけり

春毎に花は咲くだろうが、その花の盛りに会うことができないのは『命』あつての事なのだ

(D) 今ははや 恋ひ死なましを あひ見むと

頼めしことぞ 命なりける

必ず逢おうと約束したことだけが命の支えだ

(C)の歌では、「命」が本来的な「生命」の意味で使われているが、(D)の歌では、「命の支え」の意味で使われている。

古典の演習

◆指導ページ P.196 ~ 205 ◆

【指導のポイント】

★10・11課での学習内容を復習し、主語や動作主が誰かをおさえ、文章の内容を理解できるように指導する。

★古文・漢文の知識事項は、演習を通じて覚えるようにする。

演習問題の板書例

①

主君の命令 ← 雁は興味深いものだから、生きたまま取り寄せて庭で飼っておくように

大臣から百姓へ ← すぐに捕らえたのは素晴らしい。すぐに年貢も納めなさい。

浮世房 ← 年貢のことは雁や鴨に言うべきです。

← 北風にのって、雁や鴨が南に飛んで田に下り、稲を食い散らかす

← 鷹狩りのためといって鳥目をおき、罰金をかけるので、追い立てることもできない

← 稲は食い散らかされる

← いかにお雁様、お立てなされてたまはれ。さやうに稲をあがりては、我らは牢に入れらるるに

← 雁は鷹に捕まえさせるための大切な鳥なので、追い立てることができない。

← さやうに稲をあがりては、我らは牢に入れらるるに年貢が納められなくなるから。

演習問題の板書例

②

博打の子の若者がいた。

← 人並み外れた(ひどい)容姿だった。

← 顔のよい髻を求めている家があった。

← 顔を見えないよう、夜ごと通った。

← 正式に髻入りになったとき、博打がひとり、天井のぼり、鬼のふりをして言った。

← 「一つ懲らしめてやろう。お前は顔かたちと命とどちらが惜しいか？」

← 舅も姑も命さえあれば、とと思って「顔かたち」と言った。

← 鬼(のふりをした博打のひとり)が「吸う吸う」と言ったときに髻は倒れた。

← 髻は人々が見ると人並み外れた(ひどい)容姿だった。

← 「顔ではなく命が惜しいというべきだった」と髻が悔やむ。

← 舅は気の毒に思い、宝をあげ、心から大事にし、別に家も造って住ませた。

← 髻はすばらしい暮らしを送った。

演習問題の板書例

⑤

← 一条天皇は猫が好きで、命婦の位を授けていた。

← ある女房が冗談で翁丸という犬に「猫にかみつけ」と命じる。

← 翁丸、猫に噛み付く。

← 翁丸、鳥流しされる。

← 翌日、宮中を汚い犬が歩いているので、翁丸かと思いい、呼ぶが返事はない。

← えさをやっても食べないので、翁丸ではないと話し合った。

← 清少納言が犬に話かける。

← 死ねば輪廻でどこかに生まれ変わるから、「次は何の身になるのだろう、どんな辛い思いをしただろう」と言うと犬が泣き始めた。

← みんながやはり翁丸だったのだ、と言う。

← 昨日返事をしなかったのは、わざと身を隠していたのだ。

← 鏡を置いて「おまえは翁丸なのか」と尋ねる。

← 犬は恐縮しながら鳴き声をあげた。

清少納言
父の没後、一条天皇中宮定子のもとへ宮仕えに出た。そのときの日常、女房たちの興味・感想など、中宮定子の後宮の文化や精神を巧みに書きとめた。

25

文法・語句・資料問題・表現の演習

【指導のポイント】

◆指導ページ P.206～217◆

★知識事項は13課の内容を復習し、演習を通じて覚えるようにする。

★作文は自分の意見が書けるようにすると同時に、原稿用紙の使い方をもう一度確認する。

演習問題の板書例

(2)

① そういふときに、私はひとりで公園を歩きながら、大きな枯れ葉をうっかり踏んづけ、その乾いた音にひどくさびしい思いをしたものだった。

② 私は学生時代に世界を放浪する旅に出たが、各地で出会った子どもたちの澄んだひとみの鮮烈な印象は、今日、私が、世界中の人々のポートレート撮影する仕事をしていることにつながっている。

③ 人の運不運を思うとき、この世のすべての出来事には、人知を超えた「何か」が少なからず作用している気がしてならない。

(3)

① 山野斜面に植えた当時、頼りない苗木の、あるかないかもわからなかったのが、今では、このように空に伸びあがって茂る葉は日光をも通さない、みごとな林を形成するまでになったのである。

② 信頼関係というものは、個人対個人であっても、会社どうしなどであっても、自分に不利な情報を隠しているようでは、決して成立しえないのである。

③ 長い歴史を顧みて、宮大工は職人であるよりむしろ芸術家であったといえそうである。

(4)

① 読書には／楽しみのため／読書も／あれば／知識を得るため／読書もあり／ます。

演習問題の板書例

(14)

① よく考えてください。 動詞(考える)

② あまり喜ばない。 助動詞

③ あらゆる物がある。 連体詞

④ 元気な声で歌いなさい。 形容動詞

⑤ 男なのにだらしない。 助動詞

⑥ この話は聞いていない。 連体詞

⑦ 取りつく島もない。 形容詞

⑧ そんなことは子供でもわかる。 助詞

⑨ ぼろぼろ涙を流した。 副詞

(4)

④ ある日は上機嫌 連体詞

⑤ 自慢ではないが 形容詞

⑥ 自分とは何なのかわからないので 助動詞

(1)

五段・連体
うなずくなんてのは

(2)

よほど／おめでたい／精神の／持ち主でしか／起こりえない

(3)

よくの場合もそうだった。

よく 名詞
の 助詞
場合 名詞
も 助詞
そう 副詞
だっ 助動詞
た 助動詞